

〔封筒〕消印 田辺／4.10.26／后8-12

表…大阪市外、阪急線岡町宝通一丁目

宇井縫蔵様

和歌山県田辺町

中屋敷町三六 南方熊楠 再拝

裏…なし

〔本文〕

此状袋上端の右の肩少し切れあり、これは元より右様なるにて他人がした

ことに無之候。御断はり申上おく

昭和四年十月廿六日午後四時

宇井縫蔵様

南方熊楠 再拝

拝啓 貴著「紀州植物誌」一冊今日午前十時過頃拝受。小生

昨夜例の鏡検に没頭し今朝寝込み午後一時過起き、色々用多く

漸く只今拝見仕候。これは余程の上出来にて、先づは紀州魚説と並んで

今日地方植物編にこれほどのものはなきことと存候。小生若きとき米国にあり

し

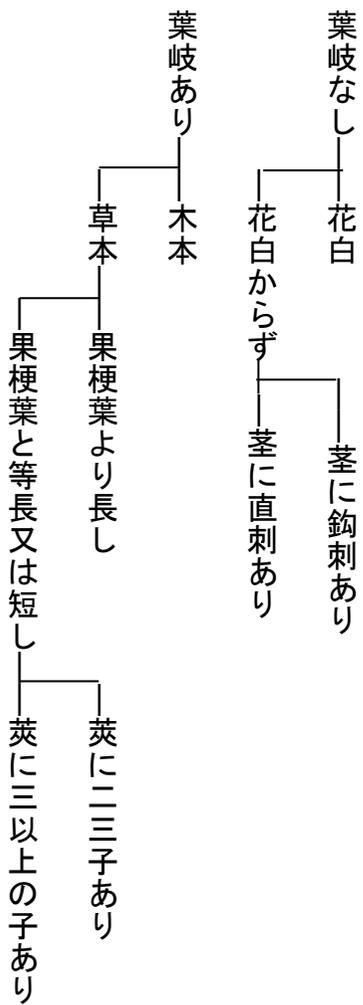
に、Wood^{ウッド}といふ人米国ミシシッピ河より東の諸地の顕花植物と羊齒

類似物を一括して極めて短かく説明し（形体諸部より花候、産地

帯迄）、一種以上ある属毎に二分法にて

¹ 宇井縫蔵『紀州植物誌』（高橋南益社、昭和四年十月十日発行）

² 宇井縫蔵『紀州魚譜』（紀元社、大正十四年一月十一日発行）



といふ風に見出し表挙げある故、雑多に色々と書き列ぬるを要せず、

野外に持行ても即座に種名は分りし。

次回御出板の節はこの風に編成されたら大に実用に立ち、多く人が

求めることと存候。

貴著一と通り眼を通した中見当りしこと左に一寸申上候。小生の腊葉中に所集の地名にして貴著に泄れたるを一二記し候。

ミツバウツギ は日高郡川上村辺りにてシヨウナと申し候。嫩葉「ミト」わかば」を食用に致候。

松柏科 ヒムロ これは在来十丈峠茶店前の並木など植えたるもののみ見候。然るに昨年三尾川の何とか岩といふ大巖あり、昔し

火の雨ふりしときその巖の下の窟に人がかくれて難を免れしといふ、その上に生たる木故ヒムロといふとの伝説を附し、枝を送り来り、今も座右に

あり。十丈等にて見たものとかはり、枝が極めて古く、天然生らしく奇態に屈りあり。送來りし人はそれに付たる地衣の名を問ひに來りしなり。之を見るに、

ヒムロといふもの間々野生もありて、それを昔しの人栽培せしことと存候。

オニグルミ 日高郡川上村に多し。ボタといふ。

ミヤマムギラン 稻成にもあり。

ナツエビネ 川上村に多し。 コクラン 川上村。 マツラン 同上。

カヤラン 同上。 久木、上秋津、秋津川にもあり。

ウバユリ ホツポウ（竜神でもいふ）。 オホバヨウラクラン

サルマメ 稻成村の岩屋観音の後の山腹に多し。

ヤハズアヂサイ 川上村。 ヤシヤビシヤク 川上村。 これに直立すると

【図】この如く垂下すると二様あり、此事山人みないふ。どうも異態のやうに思ふ。

茶 小生此程兵生にゆき、西氏宅前の住吉小祠の

森に自生せる茶をとり帰り、自宅の茶とくらべ見るに、

葉の長さ異なり、【図】兵生 【図】自宅のもの var. *rugosa* Sieb. といふものらしく候。和名何といふか知らず。

シシンラン 那智とあるがこれは果して那智にありや、怪しきことに候。昔し那智ソウなどいひしといふが、今もありや怪しき限りなり。

アツモリソウ 高野一乗院に栽ありしを聞合せしに、当山中よりとり来り栽しと島田

公雅師いへり。去年九月小畔四郎氏（牧野氏の弟子）川上村妹尾にて少々見出せり。

ハリビユ 那智の天満及び当地附近いそまのはきだめに生えありし。

ミヤマニガウリ 川上村。 モミヂカラスウリ 同上。

西秀次郎。西家は西面欽一郎の妻の実家。

フウテウソウ 那智の浜宮海辺。遁れ出でて野生したものか、但し年々生ぜり。
秋海棠 三好学氏も小生も那智にて採り、今も標品あり。家に生ずると
かはり、葉大きく直上して高さ四尺もあるべきか、家に栽しものよりは柔らかかに
て折れ易し。

花は見るに堪ず。その生ずる所は人家と懸絶したる懸崖にて、甚だあぶなき所なりし。

タチスベリヒユ 那智の天満及び近野村平井郷谷に野生ありし。

当地附近のミゾハコベに少くとも二様あり（神子浜、稻成など）。花互生して短柄花弁雄蕊共四個

のと（矢田部博士のミヅタハコベとせるもの）、花対生して無柄花弁も雄蕊も三個のものなり

（同博士のミゾハコベ）。小生此二様を多くとりて、貴下に見せんと紙に包みおきしを前日見出たり（今は又どこかへ片付けし）。これは今は一種と見てミゾハコベ *Elatine orientalis Makino* とするにと候や。

ハマナツメ 当湾ノ畑島などにあり、那智村湯川に多し（方言クモカキ）。

ケンポナシ 川上村に多し。

マサキ ツルマサキ の別は一寸分らぬ場合多きにや。小生はマサキの菓「果」梗は

葉より短かく、ツルマサキの菓「果」梗は葉より長きを尤も緊要なる見分け点と存候。ただし葉の大小をいふた斗りでは学術的に非らずと思ふ。

▲ 植物学者。東京帝国大学名誉教授。

△ 矢田部良吉。明治時代の日本の植物学者。

タラヨウ 此頃和歌山辺でモジシバといふ由。

ミヤマシキミ 二川村。 ヤナギ^マ

イヌザクラ か ウハミヅサクラ か分らず（多分二者さす）、二川村に大木多し。

伐り倒して丸木橋にする。方言セイキウザクラ。セイキウとは何の事か分らず。

ワレモカウ 田辺の生花師古くよりハシバミといふ。

ベンケイソウ 八月に北島脩一郎氏龍神奥の六里峠に通ずる深山に行しに、

モミ

トガノの大木多く、その幹にベンケイソウ生えること夥し。希有のことと驚き語れり。

不審なこと乍ら、氏は何にも心得ずとに言ふもの^マに非ず^マ。何の事か其内来らば聞合して申上ん。

アラカシ 川上村（方言コカノキ、和漢三才図会にもコカノキあり。白井博士いふ、昔し

当国南部町にて此木で桶樽を多く作れりと。宮武省三氏説に阿波等にて酒の大桶（紀州でホソといふ）をコカといふと。

コブシ 二川村高処にあり。 ヤナギイノゴ^ハツチ^ル 兵生、川上村に多し。

ミヅの類二三品何やら分らぬなりに二川村よりとり帰れり。少しく落つかば送

☆⁹ 心得ずと言ふ 言ふもの^マに非ず

心得ずに言ふ 言ふのみに非ず（も抹消？）

ヤナギイノコヅチ（柳猪子槌）。

るべし。

二川村山路などにタニガシといふ木多し。小生百方頼みおき、其の花と若葉を送りもらひ見るに、シデの一種に相違なし。これも其内標本送り上べし。

ツチアケビ　本郡長野村。　ヒナラン　静川。　モミラン　川又のはマツラン故削除するを要す。

ウキクサ科の *Monarda* は小生明治三十三年十一月十二月—三十四年一月の交、

和歌浦愛宕山円珠院の手水鉢でとりし者。今年五月十八日　聖上御覽に供すべく、和歌山弟方へ往き探せしに、今もありて持帰れり。プレパラートも現存候。乾燥品の方は極々少数乍らあり。これは台湾で見出せしものと同種か否一寸分らず（花なし）。其内何とかして幾分か切り取り可差上候。小生方へおくと遂に紛失の恐れあり。

ビヤクシン　白井博士は此辺の海岸の自生を疑ひし。然し小生此辺より富田海辺

に自生あるを見るに、中には風波の為に幹曲り又絶崖頂に生じなど、かかる所に何の必要ありてこんな木を栽ゆべきやと思はるること多し。因て再び之を言ひしに、一昨々

年春頃三好学博士に問合せしに、小豆島より常陸迄の海岸にある

と知れたり。然るも白井博士はなほ近刊植物渡来考に之を疑問とせり。

ビヤクシンは白心木とかき、三朝の頃の書に見え、仏像を此木できざみし

[∞] 白井光太郎『植物渡来考』（岡書院、昭和四年）。

記事あり。大抵は支那伝来といふ。然し支那のどこに白心木といふ名ありしことか

詳かならず。小生は兎に角ビヤクシンは本朝に野生多きものと思ふ。但し最初のものは支那から来たか否は今日と成ては到底分らず。秋海棠杯も其類なり。

スギラン 二川村。ナンカクラン 上秋津。キクシノブ 那智村天満よりひそ原ひそ原に至る

間だ薬研「ヒソやげん」淵といふ所で少許見出せしことあり。

エダウチホングウシダ 下山路村大字五味に甚だ多し。川上村妹尾にもあり。オホヒナノウスツボ 二川村。ハリエンジュ 新庄村の砂防の為栽えしに今に山間

諸処にはびこり居り、それを一本とり来り拙宅に栽しに、玄関前に根が這ひ多く生え閉口して掘り尽し捨たり。トケイソウ 又下秋津等に野生し溝漣底の敷き石をもち上げ、電柱にまきつき、それを移植せし拙宅地など満面根がはひひろがり、今に尽すこと不能、柿の木などを瘦しめ大にてこずり居候。

ヤナギヨモギ（ムカシヨモギ） 是亦小生高野及日光より自宅へ少し移植せしに今田辺の諸処へ

自生を始め居り、困つたものなり。

ムギセンノウ これは江川の誰かが美花として種しに田辺近郊より長野村辺迄

時々野生に及べり。シウメイギク 川又、新庄村大字鳥ノ巢。

チゴユリ 栗栖川栗栖川。オシロヒ 神島に多く自生す。此頃は密林となり日光及ばぬ

故、大に減じたる様子。

。ひそ原は現在の田辺市中辺路町野中比曾原のことか。

コバンモチ 近野村。方言コバモチ。ラセンソウ 四村^ニ(皆地)。

マタタビ 栗栖川大字水上に多し。ヒメシヤラ 川上村。キンシバイ 那智。

イヒギリ 川上村にてアカメガシハと混視し、共にゴシヤバ(御菜葉「ゴシヤバ」の訛り)といふ。

アカメガシハの雌本とか雄本とかいふ大木なき故、実を見ず。此頃兵生にても二木

混雑して生ぜるを見るに、一寸見分け難し。

ミヤマチドメ 川上村。シラネセンキウ 川上村。ハクウンボク 那智。

ナギナタカウジユ 富里村。アキチヤウジ 二川、栗栖川、西富田。

茄科 トマトと同形にて瘦せたる赤き果【図】を生じ、葉は茄子のやうにして

【図】

針だらけのものあり。上秋津の園原より川上社に至る道上の山側の農家の石垣に生ず。其实を八百屋へ売しに、トマトと思ひ食ひしに苦くて食はれざりし由。

二十七年斗り前より二十三年前迄そこに毎年生ぜり。小生其頃しらべしに、大抵マダガスカル辺の原産なりしと記憶す。此頃ゆきみるに、なきやうなり。これは他にも本邦に

あるものにや。其辺の家に二十七年ほど前より大なる【図】サボテンを植えありし。外国に縁ありてもち来りしが半野生と成たらしく候。

カギカヅラ 本郡三川村、中芳養、瀬戸。ノボロギク 高野山麓のは見ぬが、大正十年

十一月高野山金剛峯寺辺に多く花あり、野生するを見たり。スギラン 那智。タニウツギ 明治四十一年六月栗栖川村水上及び汐見峠の東上り口やや上の

^ニ和歌山県東牟婁郡にあった村。「よむら」と読み、現在の田辺市本宮町の西部にあたる。

方で多く見し。エゾスミレ 二川村高原。フユアフヒ冬葵 明治十四年
春海草郡松江²²の松原下にて見出す。明治三十四年四月ゆきみるになほありし。
其後の事は知ず。昔し東海道品川大森間の松原街道にもありし。相似たる地勢な
り。

ヒロハノアマナ 南富田（備前か備中の正宗敦夫²³とかいふ人持来り示され
し）。

ナチテンナンシヤウ は出居らず。これは取消しとなり候や？

右小生控えおきたる中より写して差上候。川上村にてとりし中には一寸分らぬ
もの

若干あり、其内閑を得ば可送上候（何れも凡々のものなれども、小生には分らぬ
なり）。

小生前年（大正前）、明治三十八九年頃、稲成村の稲荷社の後の小道を上りヒキ
岩の方へ

遠く行く中、ミミズバイのやうな木の頂上にへんな物垂上「ミ」るを見る。

【図】

【図】 凡そ三分二に縮図

叢葉の間よりササゲ如き果実如きものが群れ垂る。

其形ち遠く望めば蛇といふよりはミミズの如し。

甚だ不快になり（ミミズは小生大に嫌ひ也）走り帰れり。其後糸田猴神趾

にても亦かかるものを見し。小生ミミズバヒの木も葉もよく知らず、ただ右の様
子を見て、

ミミズの如き果を結ぶ故此名あることと思ひ居たり。然るに今日貴著を見てミ
ミズ

バヒは美々津なる地名のことと知れり。扱先日小倉市の宮武省三より

不意に来状あり、ハイの木を彼辺にてオバケの木といふ、葉が色々と畸形を生ず

²² 現和歌山市松江

²³ 日本の国文学者、歌人。正宗白鳥の実弟。岡山県和気郡の出身。

る

故とありし。小生ミミズバイの木をよく知ねど、其果は決してかかるミミズ如きものに非る

様なり。然らば小生見たるはなにか菌とか虫とかの所為の畸形と思ふ。貴下は諸方の山林を歩く内右様の物を目撃せしことありや。右の木は小生ただ

ミミズの形のもの垂下るを見てミミズバイと思ひしも、何の木か知らず。先はヒチノキ

(タイミンタチバナ)の葉の尖「*M. sasaki*」がトベラの葉の如く広くなりし様な葉のものなりし。

【図】これほどの大きさなり 何物たるべきか御教え被下度候。

今月十二日夜小畔四郎氏来り泊まり、十三日同氏一人岡の小学教師平田寿男氏と岡川八幡にゆきし。十四日早朝小生と営林署員一人と同乗自転車にて

福定¹⁴へゆき、それより歩いて午下兵生着、西氏に宿し、午後小生は在宿、他二氏は

坂泰¹⁵に入り粘菌新変種一発見、翌日小生は西氏前小神林に採集、他二氏は

西氏と坂泰に入り粘菌新変種一発見、溝口氏(只今兵生での豪家)の子

去年妹尾にて知り居り、夥しく菌をとり来る。十六日早朝宿を出、福定より自動車にのり、午前十一時帰宅。十七日小畔氏新庄現と前と村長案内にて

神島を一覧、其節前村長榎本氏の子幸治氏が粘菌の新種一発見、榎本

氏の父宇三郎氏は此神の林保存に尽力せし人にて、其子が神嘗祭の佳節に

新種を発見せしは珍しくも目出度事故、*Arcyria kannameana*(ルビ:アルクリアカンナメアナ) *Minakata*と命名し、図録と共に近日 進献の筈に候。行幸の節

¹⁴ 田辺市中辺路町福定

¹⁵ 田辺市中辺路町

御召

艦へ召れたとき、小生粘菌本邦産百十点を奉り、六月八日に神戸御立ちの一時前に又小畔を召れ、百五十点を奉りしも、御研究になるべく多くの参考品を差上んと六月より今に鏡検精選致しおり候。それが為め小生何の収入もなく、俸は今に少しも快方ならぬらしく、月に二百円を送るには閉口致候。研究費として積立ある内より取出すはわけもなきこと乍ら、貧にしてはその為さむる

所を見ると申し、加様なことをやり出しては、小生如きやりはなしの者は忽ち総て

崩れを来し可申候。加之娘が四月下旬来既に三度も発病、初めは盲腸炎と申すことなりしも、只今は腹膜炎を兼ね居る様にて、一昨夜も医師三名九時頃来り診察の上協議、起居の自由なるをまち当地

又は大坂和歌山にて手術を受ける筈に御座候。妻も永々四年越し以上の介抱に鬱病を起し、毎度機嫌宜しからず。和歌山にある田村廣恵も長男が病氣、自分も病み臥しありしが、昨今快方の由。其次男は中耳炎にて今年春久く悪く、六人とかの医にかかり候様子。昔しアデンス（雅典）ハ今日世界開化の淵叢といはる程の文化ありしが、ペストが大に行はれてより人氣荒廃し、文化忽ち地に落るのみか、程なく国が亡び了り候由し。人間の一家も小生家ほど念の入た病難が多く久しくつづきては、小生一人いかに剛情に健康なるも、毎日何を目的といふことも立たず、折角兵生迄行きとり来りし菌類もはや十日風雨にさらしあれば、何の役に立ぬことと存候。貴殿杯は

御子達もそれぞれ片付たれば、此上かやうな災難にあはるる氣遣ひなく、御羨ましき

儀と存じ上げ候。只今も色々と事件輻湊【難】しあるも、貴著を一覧して

思はず長文を認め差上申候。其間だが比較的に極楽境なりし。

前年貴下に托して牧野氏に一覽を乞しミゾホホヅキのアゼナ様に地に這ひ生ずるものありし。【図】 標品を無しありし故、何にやら分らずに

しまひ候。どうもへんなもの故、今度

兵生へ之きし序でに萩「ルビハギ」迄

ゆき、川原にて搜索せんと

存ぜしも、雨にて止めと致候。

これは十一月中旬頃にさくものに候間だ

今後もし熊野川原に遊ばるる日は

御注意御採集願上候。形ちはほぼ

ウリ草の如く地にひろがりはひまはる。尋常のミゾホホヅキ如く立つことなし。

花は

ミゾホホヅキの形なれど、はるかに小さし。色も彼れ如く黄色の分多からず、暗

紫の分多かりしと存じ候。標品一つ手前にあれど、花も実も失せたれば、何の

用に立たず候。先は右御受け迄申上候。

謹言

当地昨夜より大風雨、今朝より雨は止たるも今に風吹き居り、舟はみな碇泊し居るらしく候。